

神を感じさせるバルトリの歌

中 東生

スイス、チューリヒ・トーンハレでのバルトリリサイタル。会場全体が熱気に包まれ、次から次へ、アンコールと拍手喝采が繰り返されたあの晩から約2ヶ月、日本で彼女の芸術を堪能できる皆さんに、羨望と共に、私の知りうるバルトリ像をそっとお伝えしたい。

私が初めて彼女の歌を聴いたのは、15年程前のスカラ座でのリサイタルであったが、当時の彼女は神童のようであった。若さゆえの危うさ、ひたむきさ。1曲ずつ、大切に歌いあげ、それぞれの曲に存在するドラマ性が印象的だった。そして今は、女神のように成長したと言えるだろう。チューリヒでのリサイタルの翌日、彼女のインタビューをする機会に恵まれた時、「真の意味での神懸かりなものを感じた。現在ディーヴァという言葉は乱用されているが、正真正銘のディーヴァであった」と彼女に告げた。「ノー」と謙遜しつつ、彼女は続けた。「確かにこの言葉は最近、悪い意味で使われることも多いですね。気難しくて、問題を起こしてばかりの女性の代名詞のように。本当は、最高の声楽的テクニックをもって、演技力、表現力など総合的ポテンシャルのある女性に使うべきだと思います。プリマ・ドンナという言葉も同じです。まあ、私はメゾ・ソプラノなので、セコンダ・ドンナですけどね」と言って大笑いしていた。そんなところが又、気取らないバルトリらしい。

彼女の歌い方で一番惹き付けられるのは、個人的には有名なアジリタではなく、ため息のように息の上に乗せてフレーズを作る歌い方と、ピアノッシモだ。彼女がピアノッシモを歌うと、聴衆が息を呑み、全ての雑音が消える。そうすると、もっとピアノッシモになり、涙が出るほどの感動を生む。その感動を伝えると彼女は種あかしをしてくれた。「一番感情が盛り上がる瞬間はピアノッシモなのです。そしてもっと言えば、休符の間なのです。休符こそがクライマックスです。音楽が作り出す休符、息を止めさせ、何もないその瞬間こそが音楽なのです。ピアノッシモ、フォルテ、テンポの速い曲、遅い曲、こうした対比が音楽には大切です。そして、ピアノッシモが訪れた時、それを尊重すること、そして色が大切です。画家が絵を描くように、色の明暗、影などと戯れることが音楽においても必要なのです」

オペラでみるバルトリはひと味違う。一番最近に観たのは、チューリヒ歌劇場での『ジュリオ・チェーザレ』であった。ミンコフスキの指揮で見事なヘンデルの世界が作り上げられていた中で、輝く太陽のようなクレオパトラ。コロラトゥーラ・ソプラノで聞き慣れた耳には、私達が歴史物語から想像するクレオパトラの声により近いバルトリの声が心地よい。音楽的緊張感を保った歌い回し、そしてクライマックスは最後のアリアであった。感情の爆発と、超技巧のアジリタがマッチして効果が倍増する。これをライブで聴くことは素晴らしい体験になるが、バルトリという存在感が多少邪魔しているという印象が、どの役にもある。芸術家としての器が大き過ぎて、オペラの役にはまりきらないのかもしれない。彼女の高レベルな芸術を堪能するには、やはりリサイタルが一番だと思う。例えば、『ジュリオ・チェーザレ』の最後のアリアを短縮形にして、1月のリサイタルのアンコール2曲目に歌ったが、同じ曲と気付かなかったほど、クレオパトラのアリアではなく、バルトリの歌になっていたと言えば、その微妙な違いが解っていただけるであろうか。

そして、リサイタルを聴衆と一緒に盛っている姿は、『クラシック界のポップスコンサート』と比喻されるほどだ。それは、彼女の音楽に対する愛情、歌うことの楽しさ、聴衆と感動を分かち合いたいという精神がまっすぐに伝わってくるからだろう。彼女が舞台に出てくると、聴衆全員分のテンションを上げてしまうオーラがある。「温かい聴衆は貴女のオーラが作っているようですね」と言うと、「いえ、音楽です。私はただ、再現しているだけです」とすかさず答える。心底彼女は音楽の僕しもべのようだ。「もちろん沢山勉強しなければなりません。でも、音楽を愛していれば、その愛情が音楽を通して皆さんに伝わるのだと思います」

現在まで数々の成功をおさめてきた彼女にとっても、今回のカナダを皮切りに始まった『禁じられたオペラ』ツアーの成功の大きさは驚きに値するようだ。「どの街でも、毎回大喝采を浴び続けました。これは特別なことだと思います。これらの曲は、例えば『ボエーム』や『椿姫』のようにポピュラーでスタンダードなレパートリーではないのにもかかわらず、音楽が携えているメッセージを伝えることに成功したのですから。そして新しいレパートリーを発掘するというアイデアを尊重してくれる聴衆がいるのですから。これは大切な事です。例えばモーツァルトにしても、確かに天才ではあるけれど、唯一の天才ではない。先人達から影響を受けてこそ、天才であり得たのです。私にとっては、そのように、音楽の原点に帰ることはとても有意義だと思います」

普段の彼女は普通過ぎてビックリするほどである。パートナーのスイス人バリトン歌手オリヴァー・ヴィトマーと一緒にCOOPに買い物にも行くし、先日もテレビに出ていたので観ていると、レストランで母君と一緒に割烹着風の出で立ちでイタリア料理を作り、給仕までしている。そんな飾らない姿勢も、どんなに有名になっても、音楽に対する尊敬の念を忘れていない彼女ならではなのであろう。

この文章を書くことが決まり、マネージャーを通して、スペインにいるバルトリに、特に何か皆さんに伝えたいことがあるかと電話してみた。「このプログラムのテーマは、『ロマンティック』です。ドイツ、フランス、イタリアで、モーツァルト以前の音楽が、モーツァルトを経てどのように発展していったのかを、私なりに皆さんにお聴かせしたいと思い、プログラムを組みました。きっとご満足いただけると思います」。私もそう確信して筆を置きます。どうぞ、ご堪能ください。

(なかしのぶ 音楽ライター)



チェチーリア・バルトリ

18世紀初頭のローマにて、オペラが禁止された時代…
「オラトリオ」の名を借り、オペラは生き残った。
バルトリは、彼女の生まれ故郷であるローマにおける
このユニークな時期の作品に光を当てました。

禁じられたオペラ



CECILIA BARTOLI
OPERA PROIBITA
LES MUSÉUMS DU LOUVRE - MARC MINOZZI
DECCA

世界初録音8曲収録。
ヘンデル、A.スカルラッティ、カルダーラのアリア集
CD:UCCD-1152 定価¥3059(税込)



歌詞対訳

Scarlatti : Già il sole dal Gange

Già il sole dal Gange
più chiero sfavilla
e terge ogni stilla
dell'alba, che piange.

Col raggio dorato
ingemma ogni stelo
e gli astri del cielo
dipinge nel prato.

Gluck : O del mio dolce ardor

Oh, del mio dolce ardor
Bramato oggetto!
L'aure che tu respiri
Alfin respiro.
Ovunque il guardo io giro
Le tue vaghe sembianze
Amore in me dipinge,
Il mio pensier si finge
Le più liete speranze,
E nel desio che così
M'empie il petto,
Cerco te, chiamo te,
spero e sospiro!

Oh, del mio dolce ardor, ecc.

スカルラッティ : ガンジス川に日は昇り

はや太陽はガンジス川にのぼり
明るさを増し、輝きを増す。
そして一粒残さず拭い去る
夜明けの涙のような露の雫を。

太陽は金の光で
残らず草を飾り立てる。
そして大空の星を映したように
野原を彩り輝かす。

(詞：不詳 訳：小瀬村幸子)

グルック : おお、いとしい恋人よ

おお、わが優しい情熱の
あこがれ止まぬ相手よ！
きみが吸う空気を
わたしも吸わずにはおくまい
眼差しを向けるさきざきに
きみの麗しい面影を
愛が描いてみせるのだ
わたしの想いは、その気になって
この上なく明るい希望に身をひたす
そして、こうまでも
胸を満たす希いのうちで
わたしはきみを求める、きみを呼ぶ
待ち望み、吐息をつく！

おお、わが優しい情熱の…… (くりかえし)

(詞：ラニエーリ・デ・カルツァページ 訳：濱田滋郎)

※ページは静かにおめくりください



日本生命



NTT都市開発

チェチーリア・バルトリ & チョン・ミョンファン
デュオ・リサイタル

2006年3月27日[月] 19:00開演
東京オペラシティコンサートホール
タケミツメモリアル

主催: 東京オペラシティ文化財団
協賛: 日本生命保険相互会社/NTT都市開発株式会社
招聘・制作協力: IMXクラシックス&アーツ/CMIジャパン



TOKYO
OPERA
CITY